

地域におけるスポーツの普及

～鹿児島県樋脇町におけるホッケーの事例研究～

岡田 猛

Sport Development in Small-Town : A Case Study of Field Hockey in Hiwaki,

Kagoshima Prefecture

Takeshi OKADA

I. 緒言

鹿児島県の北部に位置する樋脇町。のどかな田園や森林の広がる人口約8,500人の、どこにでもみられる地方自治体といえよう。鹿児島県民でさえ、樋脇の名前を知らない人々も少なくない。このような何の変哲もない一地域に、ホッケーというスポーツが根付き、住民に親しまれている。

ホッケーはイギリスの上層階級で愛好されてきたスポーツではあるが、日本ではマイナーな位置に留められてきている。

多くの人々が、ルールはおろか、その存在さえ知らないという状況であろう^{注1)}。

このように、いわばマイナーな地域とマイナーなスポーツが結び付き、長年にわたって地域に根付いてきたという現象は興味深い。おそらくは固有の歴史的契機と、定着・普及を可能とするような風土や環境、社会的条件がはたらいたのであろう。

近年日本においても、真の“豊かさ”とは何かをめぐって、物質中心の社会構造が見直され、クオリティ＝オブ＝ライフ、質的に生活を捉えかえそうという論議がある。このような観点からスポーツにも新たな意味づけがなされ、生活、地域と結びついたスポーツのありようが改めて追究されてきている。

樋脇という一地域におけるホッケーというスポーツの定着・普及の過程を詳らかにすることは、このような追究にも寄与することが期待されるであろう。

II. 高校における新スポーツの導入

樋脇とホッケーのつながりは、1951年（昭和26年）に遡ることができる。鹿児島県立樋脇高校における体育の正課として導入された。同校は1948年に東郷高校の分教場として設立され、1950年樋脇町立樋脇高校として移管創立されて、翌1951年に県立としてスタートをきったのであった。いずれにしても、ホッケー導入時の同校は新設校とほとんど変わらない状況にあったとみて間違いはないであろう。

このような状況にあった当時の樋脇高校に今日でもめずらしい種目に属するホッケーがどうして導入されることになったのか。まことに興味ある問題であるが、その際イニシエーターとしての役割を演じた前園清一氏にその間の経緯について語ってもらうことにしよう^{注2)}。話にも出てくるように、同氏は当時同校の体育教諭として勤務していた。

こんなに大勢の皆さんの前で話をできますことを感謝いたします。樋脇町といえばホッケー、ホッケーといえば樋脇町、この言葉は全国に通じております。うれしいことではありませんか。私がこの樋脇の地に、ホッケーという「一粒の種子」をまいたのがこんなにも大きく育ったのであろうか。私は感激で一杯であります。そこで今、このホッケーという競技が、何故この地におろされたのであろうか、その苦心談をここで話してみたいと思います。

わたしは自分のことはあまり言いたくありませんけれど、関係したその間のことについて、ホッケーの由来等について話してみたいと思います。

私がこの地に御厄介になりましたのは、紹介にありましたとおり昭和24年。皆さんはどう思われますか？ 39年前のことです。

39年前と一口にいいますが、皆さんはこの世に生まれていなかったのです。39年前、その当時、樋脇高校で教えていた子は今55、56歳になっています。考えれば長い人生であったように思われますし、私は今日ここに立ったのは、今日も来た、その前もまた来たというようなことで夢にも思わなかったことです。現在もそうであります。

我が町、樋脇、この樋脇に7年間、お世話になりました。7年間という期間、あつという間です。私は何故、樋脇にホッケーをおろしたのか？ これが問題なのです。誰もが知りたがっていることだと思えます。

当時の樋脇高校は、ちょっと歴史をさかのぼりますけれど、最初は東郷高校の分教場ということで、定時制の学校でありました。その後、昭和25年に町立の普通高校として開校になりました。その時の校長先生は、〇〇校長先生で、皆さんの知っていらっしゃる市比野の先生でした。その校長先生が学校の教育目標を掲げられました。私はこの学校をこういう学校にしたいということで、教育目標として三つのことを掲げられました。

一つは、他の学校に勝るとも劣らない生徒になって欲しいということ。二つ目は、将来この町の担い手となる人物をつくる必要があること。三つ目は、根性のある人間に育ててもらい、しっかり働いてもらわなければならない。つまり、人づくりを目標に置くということでした。

当時私は、体育の主任として、体育の目標でもこの三つの理念に叶うような教育をしなければならぬと思いました。

この目標を達成するためにはどうしても、教育の内容に触れなければならない。当時の教育内容としては、玉川学園のような近代的な教育をしたいと、口癖のように言っておられました。その目標に合わせるためには、近代的な要素をもち、立派な紳士的な内容をもつもの、そういう内容を備えた近代的スポーツをやるのが・・・そのためにはどういふ種目をしたらいいのか？ 新制高校の出始めでしょう。生まれたばかりの赤ちゃんから他の高校と比べますと、どうして一足跳びにできましょか。サッカーやバスケットなどをやってもそれだけの成果をあげるには何年かかるかわからない。そういった教育をしっかりと子どもはいじけてしまって、せっかくの高校がだめになってしまう。これではいけない。生徒にもっと誇らしく思うような高校にしたい。これが第一のねらいでした。そのためには、今まであるような部を一生懸命育てても間にあわない。教育内容もうんと新鮮にして学問的には一流大学にも多く進学できるような高校にしなければだめである。数学、国語、他のいろんな担任の先生も一生懸命生徒を育てようとしたのですが、私は体育の面ではどうしても生徒に誇りを持たそう、自信を持たそうとしました。樋脇高校の名誉を育てていけるような人物を育てなければならない。私はそう思って、実はホッケーを選んだのです。ホッケーといってもその当時は皆目県内にはありませんでした。大学でホッケーをやっているところもめずらしいぐらいでした。日本ホッケー協会ができたのも私がホッケーを始めてまだ後のことでした。ホッケーを選ぶには選んだのですが、何にもないところでホッケーといたってわかるわけがないことです。そこで、まず学校の先生達のなかにまず浸透させなければならないと考え、教頭先生に相談してホッケーを教えたいと思いますがよろしいでしょうかと聞きましたところ、「やり給え」と・・・。但し、ホッケーだけでは困るよ、他のものももっと我々がやれるようなものはないか、ということでした。

そこでバドミントン、ホッケー、門球(ゲートボール)、この三つをなんとか取り入れようと計画をたて、これをするにはどうしたらいいかと考えたときに、そこでまず生徒に、実際に体験させなければだめであると考え、そ

うわけで、ホッケーのスティックを11本とボールを1ダース揃えて、正課体育でなんとか買ったわけです。そしてその道具で、基本練習から始めました。私自身、日体大卒でしたが、その頃、ホッケーという競技を早く取り入れなければ時代遅れになるといって、寮対抗でホッケーをやった、それが初めての体験でした。しかし、私はもともと陸上部育ちでホッケーのスティックなど握ったこともないでした。そもそもホッケーがどういうものであるということや打ち方などは学びましたが、選手になる気はなかった。それを樋脇にもってこようと思った。きっとおかしいのではないかと思われるかもしれませんが、それはホッケーがもっている要素を考えたからなのです。

木でボールをたたき、ボールをキャッチする、あの曲がった変なスティックでボールをたたきゴールをすれば一点である。そのためには、非常な努力をしなければならない。フェイントもかけなければならない。たった一本のスティックが白球を追って、一生懸命動いていく、うまくつないで、ゴールまで持ち込む。11人の者がしっかり、そういうポジションを守らなければならない。そういう団体競技の特質もっている。動作が非常にデリケートである。他人をたたいたら反則、ぶつからずにうまく走ってパスをしながら得点をする。そういうデリケートさをもっている近代的な競技であり、イギリスに発達しただけにあって紳士的である。これはどうしてもやらなければならない。そう思って、11本のスティックと1ダースのボールから始めたわけです。

正課に取り入れた、これが樋脇のホッケーを推進していくための力となったと思います。また正課に取り入れ、皆がやる、ひとり残らずやる、もちろんやると言っただけで、ゲームができるわけがない。しかし基本動作として、こんなふうにするんだと教える。生徒が興味をもってきた頃を見計らって、諸君、君たちの家は農村出身が多いだろう。今日帰ったら、父母に相談して、山で木を切ってこい、樫の木がいいだろう。こういう木を切ってこい。

生徒はすぐに切ってきました。私はそれを見て涙がでましたね。ゲームをやらずにもスティックがなければできないわけですから。早くゲームをやりたいでしょうがない。だから木を代用させて、ゲームをやらせたんです。なかには、ボールをたたけば曲がるもの、折れるもの、いろいろありました。そうこうしているうちに、昭和26年のときにぼちぼちゲームをやらせて、昭和27年には部活動にもってこようと考えたのです。いつまでも正課でやっていたのではうだつがあがらん。この辺で部をつくらうではないかと思い、生徒会にはかりましたが、まあここにお金がありません。そこで同好会にしてくれと言いました。予算がないが、それでもよければ同好会をつくりなさい。ホッケーの良さがわかっているから、皆喜んで同好会でもよいからということになり、初めて同好会が発足しました。

その後も試合をしたいが、相手がいない、対校試合をやるうにも試合ができない状況にありました。その時鹿児島商業がホッケーを作ろうという噂は聞いていたのですが、まだできていませんでした。そんななかで翌27年に部に昇格させてもらいましたが、相変わらず予算は少なく何も買えない状況でした。それでも、だんだんと道具を揃え、ゴールポストを木で作って揃えていったのです。

その頃の生徒は張り切っていましたよ。「よしやるぞ」という気がありました。そこで技術的にはホッケー協会がスティックなどの世話をしてくれましたが、なかなか高く買えませんでした。しかし、なければできない。注文するインド製スティック、これが一番よいのです。それを一本もらって指導を受ける。福岡の三菱化成から指導に来てもらったりしたものです。実業団としては強かった。ここに頼んで練習をさせてもらったのです。わざわざ樋脇まで来てもらいました。その時には樋脇の校庭も広く作ってもらい、運動場をだんだん広げてもらいました。当時は山の向こうに池があり、それも埋めてもらい、立派なコートができました。立派なコーチをよんで、さあこれからとなりました。

またホッケー協会にも東京から人を派遣してもらい、コーチをしてもらいました。そうこうするうちにも、それでもまだ足りない。技術を習いたいにも、その状況がわからない。当時のキャプテンの〇〇という人が熱心で夏休みなどを利用して、山陽高校を見て練習を教えてもらおうと言ってきましたが、予算がないと言いましたら、自費でも行くと行ってきました。当時の名門校を見ながら技術を覚えていきました。

ホッケー部も強くなってきました。遂に、昭和30年になりまして、国体にやっと出られるようにしてもらいました。私も指導者という立場で出ましたけれど、福島の高校と当たり、あつという間に勝ちましたが、2回戦は負けました。自信をもつようになってきました。並々ならぬ苦勞もありました。さらに大事なことは、樋脇町の皆さんがホッケーというものの内容をしっかりつかんで理解してもらうに限ったんです。そのために、昭和27、28年頃に体育祭にエキジビションとしてホッケーを披露し、ゲームをやりました。皆に見てもらいたくて、その時は解説つきで行いました。ゲームの内容、規則などを理解してもらいながら実施しました。

さらに大事なことは、当時の樋脇町の為政者の方々、一般の人々がホッケーに理解を示し、そしてしっかり後押しをしてもらったからだと確信しております。こういう方がいなければ、現在の樋脇のホッケーは生まれていなかったと思います。皆さん、今のこのホッケー人口をご覧ください。私たちが高校で始めたときと比べて雲泥の差を、し

かも町長はじめ教育界の方々はもちろん、一般の方々の後押しがあればこそ、現在の樋脇町の町技として、これが残されたと思うのです。ただ単に皆さんが試合に出て、勝った、負けたというだけではないのです。その陰には、強力な後押しがあるのです。これを忘れないようにしてもらいたいと思います。

これからも樋脇のホッケーが、ますます人口を増して、もうホッケーを知らなければ、樋脇には居られないというくらいになる時がくるかもしれないと思うのですが、皆さんもその気になって、ホッケーをますます大切にして、ホッケーのもつ精神を皆さんの生活のなかに取り入れて、発展していただきたいと思います。樋脇町もそれに伴ってますます発展していきますよう、樋脇町のホッケー、町技としてのホッケー、さらにホッケーを通じての樋脇町、これは切っても切れない縁でございます。

どうかこれからも、しっかりと根をおろしてもらって、ますます町が栄え、ホッケーが発展していきますことをお願いしまして、講演を終わりたいと思います。ありがとうございました。

誕生して間もない高校の生徒に、他の伝統ある学校に伍してやっていける自信と誇りをもたせるために、体育では何ができるのか。サッカーやバスケットボールのような、伝統ある高校で既に長く行われてきたメジャースポーツでは、追いつくまで何年かかるかわからない。いつまでも後追いの状況ではかえって生徒達をいじけさせてしまうことにもなりかねない。

ここに他の高校ではあまりまだやられていないマイナーなスポーツでなければならなかった理由があったのである。

それではどうして当時でもめずらしいホッケーが選ばれたのであろうか。前園氏は「ホッケーのもっている要素」に注目した。それは、団体競技としての特質、動作のデリケートさ、イギリスに伝統的なジェントルマンシップである。用具、練習方法など、マイナーでハイクラスなスポーツを一地域でやることゆえの困難、およびそれへの対応過程なども、当時の生活背景などともに、興味深い内容の話になっている。

一般に体育教師は自らの経験種目に依拠しがちになると考えられるが、前園氏にほとんど自身の経験のないホッケーをとりあげさせたのは、前述の問題意識の強さ以外には考えられない。もちろん、述べられているような学校としての三つの目標にも支えられてのことであることは言うまでもない。

運動部活動の母校アイデンティティー形成機能という、今日でもヴィヴィッドな研究課題ともなりえる現象が、素朴なかたちで提供されているといえよう。

このようにして導入された樋脇高校のホッケーは、当初の前園氏の意図をもはるかに越えて、目覚ましい実績を築いてきている。表-1は主な大会における成績をまとめたものである。

表-1 樋脇高校のホッケー部主要成績

年	全国高校総体	国民体育大会	全国高校選抜大会
1955		初出場	
1959		4位	
1966		4位	
1968		3位	
1969		2位	
1970	2位	1位	
1971	1位	3位	1位
1972	3位	1位	2位
1973	2位	1位	
1974	3位	3位	
1975		1位	
1976	1位	3位	2位
1978	3位	2位	
1979	2位	1位	3位
1980			3位
1981		1位	4位
1982	2位	2位	2位
1983		1位	2位
1984	3位	3位	3位
1985	4位	3位	3位
1986		3位	4位
1987	4位	1位	
1988		3位	
1989			2位
1990	2位		1位
1991		1位	
1993		4位	

ホッケーの世界では、有力な伝統校としてその名を全国に知られるようになってきている。鹿児島でも、大会の度に地元新聞で報道され、国体における鹿児島県の得点源として貢献している。地元樋脇では、全国大会の時期には町の有線放送で結果がその日のうちに知らされ、町民はホッケーの話題でもちきりになる。自治体は相応の経済的援助による支援体制を整え、バックアップしている。

鹿児島県で名誉ある賞とされる「南日本スポーツ賞」が1973、1975、1976、1979、1983、1987、1990の各年度に授けられ、このこともまた同校、樋脇町の誇りとなっている。

Ⅲ. ホッケー部員の心情点描

伝統ある名誉といっても具体的には各々のプレーヤーにおけるその実体化を欠いては成り立たない。ただプレーヤーにおける実体化を促す様々な社会的条件、いわば、学校を含めた地域社会におけるそのための仕掛けの枠組みが背景にあって伝統や名誉の内実を形成しているのはいうまでもない。

このような文脈においてみた場合、伝統や名誉を担わされている当のホッケー部員はどのような心情のもとで部活動を展開しているのだろうか。

また、運動部活動は発達期にある高校生の活動欲求を満たすだけではない。その活動の成果がプレーヤーのキャリア形成に有意な寄与をなすことがある。いわゆる運動部活動のキャリア形成機能である。指導者や、特に保護者はそのことを考慮のなかに入れていている場合も多いと思われるが、当の運動部員はその点をどう認識しているのだろうか。

以上の問題意識のもとに、運動部を引退したばかりの部員にインタビューを試みた。

社会人としてホッケーを継続していくことになっているU君である^{注3)}。

高校に入ってからホッケーを始めた。それまで、中学時代に「ホッケー祭り」で1回プレーしただけ。高校入学後もそれまでのサッカーを続けるつもりで、初め1週間はサッカー部で活動。高校の同級生、中学時代の先輩から誘われ1日だけホッケーをやってみた。楽しかったので入部することにした。中学の先輩とは、小学校からずっとホッケーをやっていて、中学校3年次からたまに高校ホッケー入部の声をかけてくれ、今は福岡の実業団で活躍しているひとである。

小学校3年(スポーツ少年団)から中学(スポーツ部)まではサッカーをやっており、副キャップをした3年時、県大会で初優勝を果たし、九州大会(1回戦敗退)にも出場した。樋脇高校ホッケー部の存在は中学校になってから知った次第である。

高校での練習は月～金曜日は学業終了時4時頃から日没まで。土曜日は午後から日曜日は午前9時から、それぞれ5時30分までであった。練習後はへとへとになった。しかし、辞めようと思ったことはなかった。

Jリーグの現況をみてサッカーを続けておればよかったとまでは思わない。

1年時には1回補欠として沖縄へ遠征した。

2年からはライトハーフとしてレギュラーの座を獲得した。

一番価値のある国体での成績は1年次ベスト4、3年次1回戦敗退であった。2年次は欠場。

インターハイでは1年次、2年次それぞれ2回戦敗退。3年次でベストエイト。

全日本高校選抜大会(新人戦)では2年次九州予選敗退、3年次全国大会1回戦敗退。他のスポーツもある程度こなせ、学科では体育、数学が得意であった。テスト勉強は1週間の試験休みにおこなった。

空いた時間は川内へ友達と買い物にいたり、じいちゃんの農業の手伝いをした。

父母は会社員であり、現在はスポーツはやっていない。自分には自由にやらせてくれ、特に励ますということはない。

しかし、試合の応援には、時には仕事を休んででも来てくれ、中学時代のサッカーでは1回戦から、九州大会まで観戦に来てくれた。

母はバスケット経験者であり、中・高校では部に入っていた。父は駅伝をやっていた。入部早々、父の知り合いが家に来てホッケーの話をしてくれ、スティックを1本くれた。ホッケーは危険性があり、気を引き締めてプレーしなければいけないという主旨であった。彼は、その兄が父の同級生である、ホッケー部のOBであった。

1歳違いの弟がいるが、彼もホッケー部のレギュラーであり、一緒にプレーした。彼も中学まではサッカーをやっており、ホッケーは高校からである。自分が特に誘ったわけではない。

家庭ではスポーツのことは、特に試合のあった日など、技術、試合展開、部員のことなどかなり話題になった。

就職先はT県のS会社に決めている。監督から紹介された。プレイを見てもらったことはまだないし、自分もパンフレットだけで、会社、施設、チームを見たことはない。給与は普通で仕事の内容は詳しくは聞いていないが、仕事の後練習することになるだろう。当社には先輩もいないし、当地に親戚もいないので母は“ちょっと遠かったなあ”といている。

6年後T県では国体が開かれるので、そのための強化選手でもあるのでこれから強くなるチームだろう。国体終了後は九州内の近い工場へ転勤を希望している。九州のどこに工場があるかは知らない。

自分の子どもにはホッケーをさせる気は別にないが、スポーツはさせたい。聞かれたらホッケーを勧めるかもしれない。

スポーツをやればいい就職先ができるし、友達もできる。

父母は運動部活動の経験者であり、特別な激励はなかったとしても、他県での試合に応援、観戦に行っているところをみると、理解のあるほうであったといえるであろう。練習はハードであった。

中学時代はサッカーをやっており、しかも県大会で優勝をする程のレベルにあったにもかかわらず、既に高校でのホッケー勧誘をOBから受けていたこと。高校での入部早々、OBの訪問を受け、スティックのプレゼントとともに、プレー上の心構えを聞かされていること。これらのことは、中学時代の「ホッケー祭り」での出場経験とともに、彼を高校ホッケー部へとすすませる、地域社会で生きてはたらいっている社会的仕組みであるといえよう。1歳年下の弟が彼と全く同じコースを辿っていることをみても、伝統を支えているこの社会的仕組みの根強さが理解できよう。

高校3年間の部活動により彼は銘柄企業への就職という成果を得、将来の九州内への転勤というコースを念頭におきながら、人生設計を立てているのである。運動部活動のキャリア形成機能のひとつの例をみることができる。

卒業生数が100人を切るという地方の高校において、超有名なW大学へ数名の入学者を出していることも運動部活動のキャリア形成機能の別の面での結果であろう。

IV. 家庭婦人ホッケーの興隆～イベント開催のスポーツ普及機能～

ところで、樋脇高校において特定の意図のもとに展開されてきたホッケーは家庭婦人のあいだにも普及していくことになる。余暇・レクリエーションから長い間最も遠ざけられてきた婦人、しかも農村における婦人と、ホッケーとの結びつき。この興味ある現象を生じさせる契機を与えたのは、1972年に鹿児島で開催された第27回国民体育大会である。

それまでの樋脇高校の実績が評価されたのであろう。樋脇高校グラウンドが同大会のホッケー競

技の会場となったのである。樋脇高校が優勝したのをはじめ、一般男子、一般女子の活躍もあり、鹿児島県ではホッケーの総合優勝を飾った。

大会で接待係としての役割が割り当てられていた婦人会は、湯茶のサービスに加えて、ホッケーについての理解も必要ではないかということで、ホッケーの実際にも足を踏み出すことになったのである。

当時中心的な役割を果たし、その後の婦人ホッケーの発展にも力を注いでこられた東野郁子さんへのインタビューの機会を得ることができたので以下に再現してみよう^{注4)}。

初めはね、婦人会が簡単な気持ちで国体にお茶を出したり、接待のほうを言われたので、その時から、少しよそから来た人にホッケーの事を聞かれたときに知らないと困るから、2、3日勉強しようとお願ひして、試合のことを聞きました。そしたら、役場の人が「一チーム作ればすむんだが」と、大会に対してのリハーサルを少ししたらどうかということで、そこから始まりました。婦人には子供がいるし、老人を抱えていたりして、運動に出ることは、今は開けてきましたけど、あの頃はなかなか、封建性が強いところですからね、田舎は。姑がやかましかったですからね。集落の人が二チーム作るように頼んできました。私が会長自体ではなかったんですけどね、前の会長が生きていたときに、副会長だったんですけど、運動が優れているということで、是非ともしてくれと。

運動が得意な人や、血気盛んな人や連れてきてもらって二チーム作りました。2日間話し合いをもって、当時は11人制だったため、大変な人集めでした。補欠も必要でしたし、予算もなかったので皆さんから寄付金をもらって、全部私がやったんですよ。ルールやらホッケーそのものを理解したい、理解をするためには一応やってみようと思ひ、もう亡くなった人なんですけど、〇〇さんという方が援助してくださるからということで、私に出てくれませんかということでした。国体がすんだら実際チームを作ろうということでしたが、家庭持ちはなかなかできません。そこで、婦人会の仲間作り、体力作りということで、昭和48年にチームを作りました。

国体のときに高校生やPTAと当日二チーム組んで実際にやりました。おかしいのか、見ている人がみんな笑っていましたよ。温泉や接待に婦人会を割り当てて、町全体を挙げてホッケーのことを話題にしながら話しました。

東京に行くときは親戚の人に会いたいからということで応援にも来てくれましてねえ。それで家族の人も納得してくれたんですよ。今考えるとおかしなことなんですけれども、当時は真剣でした。それじゃあ練習しなきゃというふうになって熱心に取り組むようになってきました。県人会の人なんかにも応援に駆けつけたりしていただきましたよ。子供が小さい人は別にして、こちらからは行くだけのお金しか出してあげられませんでしたから、ほとんど自費なのに、募集したら結構集まってくれたんですよ。15人ぐらいでした。今考えると滑稽な話なんですけど、今は町費で、社会教育課の人やら、町長さんやらと一生懸命にやったださいますけれども。とにかく、連れて行って迷子にならないか心配でした。二、三回ごろからきちんとチームの服装をそろえて、みんなでそろえば怖くないということでそうしました。空港などでは、何があるんだろうとじろじろ見られましたよ。体格のいい人ばかりだったから、スポーツをしている人だということで、私達は悠々としてましたけど。

初めは行くまでが大変でした。子供さんがいるし飛行機が落ちたらどうしようかと。当時から現役でやっている人はまだいます。中学、高校、そして今と樋脇町ではホッケーをやっている人がご主人になっているのでホッケーをやることをみんな許してくれます。子供は我が家で無理してでもおばあちゃんに面倒見させるからといって、送り出してくれるんですよ。樋脇高校はそういった意味で下地になっています。

婦人がまとまっていくのは大変でした。大会前はお願ひに回ったりしてですよ。そして、選抜して回っていました。おじいちゃんが寝たきりだったり、さまざまな家庭の事情で大変でした。嫁は行きたいけれども、家族が反対という感じですね。ご主人がして、おじいちゃんも前に応援に行っている人なんかは、どうか嫁を連れて行ってくださいということで後押ししてあげていたんですよ。

今はしやすいものですよ。選抜されればみんな送り出してくれます。昔はどう説得するかが大変でした。家によってはご主人に、あるいはおばあちゃんに聞いてくださいということで様々でした。出発のときは見送りが大変で、送り出すとき、親も子も泣く人がいてそれはもうかわいそうでしたよ。戦争に送り出すときのような感じでした。

最初は親戚に会うためになどというのが動機だったんですけど、やっていくうちにホッケーそのものに楽しみを見

いだしてきました。当時は家庭婦人ホッケーということで経験者はだめでしたが、途中からはよそのチームでは経験者が入ってきて優勝できなくなっていました。そこで、だいぶんもめたりしたんですけど、東京辺りの人達と。樋脇でも高校経験者などが参加したりして、ご主人の指導もあったりして強かったんですよ。

ホッケーを通じて、家族の近代化というか、オープン化が進んだんですね。町での大会も盛大にやるので、家庭の主人やら、子供やら、夜に応援に来ます。「ホッケー祭り」がそうだし、婦人だけのものです。物凄いいものでした。有名になりましたよ。週一日おきに夜練習しています。小学校にも割と早くから照明が設置されていきました。子供は経験者のほとんどが樋脇高校に行きます。

小さい子も子供用のスティックを持って遊ぶようになりました。当初は監督やら、選手やら、お茶だしやら、全部私が兼任でやっていたんですよ。そのうち、補欠にしてください、年をとっているのよということにしてもらったんですよ。走るので長続きしないし。とにかく走るから選手は足の速い人を選んでいました。町の補助は成績が上がるのにつれて、むこうから出すようになってきました。「ホッケーの樋脇町」となったのなら、婦人にも出して、ということで出してもらうようになりました。主人も、夜の7時頃になったら、早く準備していかなければならないよということで応援してくれるようになりました。私も夕食は自分で食べてくださいねということで準備して練習にでていくようになりました。ホッケーは自分の町内だけでなく、他の地区の人と交流するのに大きく貢献しました。それで、全然知らない土地でもわかるようになりました。

選手が各地区から集まったときには、私が何日にはあっちのクラブでして、別の日には、という感じでしていました。そこへみんな上手な人が集まってするわけですから、大勢の人が応援に来てくれる。なるだけ私が各地区から選抜して、その上にいい人をたてればとしていたので、そうしましたら、その地区民の人がお茶やら出してくれて、いい勉強になって、もまれた人より詳しくなりました。

家庭のお嫁さんは今では少しは出やすくなりましたが、ホッケー、ホッケーと言ってもここの基幹産業は米作りで、たんばに出なければならぬので、農作業があるのにホッケーをして、などと言われますが、私などは人に頼んでも米をたくさん出していました。私はその間にしているんだから、そんなに言われなくても大丈夫ですよ、必要なときには家に戻しますからと言っていました。

農協の会などにいくとよく言われましたが、このごろはみんな協力的ですね。みかんの収穫の時は、皆さんで食べてと持ってきてくれたりして。

もう、私がいなくても大丈夫だろうと思って、後任の人に譲らないと思っても、ホッケーがあるからなり手がなくて困りました。皆さん大変なことがわかっていますから。人集めをしたり、引率をしたりしなければならぬから。お茶沸かししたりしてですね。夜は人より多く県の会に行って、練習日には朝から麦茶などの準備をして持っていくたりして、そういうことを見ているから、私じゃないと続かないからと言って褒めてくれるんですけど。婦人会長は若いときからの積み重ねが大事ですから、若い人に自分の元気なうちに全部譲り渡して、私はその外から援助してあげるからということで。それでも会長を15年していました。副会長、会長と65歳までしていました。もうやめて5年になりますから70歳になります。私がいかなかったのは子供がお産で帰ってきたときでした。文部大臣賞をもらいました。

若い頃はホッケー以外にバスケットボールをしていました。身体は小さいんですけど、動きが素速くて。キャプテンをしていました。走りぐらとかでも記録を出したりして、運動は兄弟はだめだったんですけど、私は好きでした。高等女学校4年生を出て、専攻科を出ました。家政科です。夏休みには合宿などもしていました。キャプテン経験が将来の下地になりました。みんなよく言うことをきいてくれて、なつかしかった。小学校から高等女学校と、学校の中でもスポーツは盛んでした。よく気が合ってみんなで一生懸命でした。

兄弟は姉一人、弟二人です。姉はスポーツがだめで、私がいないと運動会が面白くないというほど運動がだめでした。私はとにかく運動が好きでした。学生時代もクラスの委員長などをしたりしてそれが後になって活きましたが、今考えると馬鹿だったなあと思います。女がじっとしておらずに。おてんばだったのかなあと思います。

嫁に来ると義母が、母親同士が姉妹なんですけど、すぐに婦人会に入れて、私は婦人学級などに参加していました。義母も集落の婦人会の会長などをしていました。それで、勉強にいくときなどはすぐに出してくれました。一人で砂利道を自転車こいで行っていました。おばさん達と仲良くなってたくさん仲間ができました。ちょうど義母と同じくらいの人達の中に入っていったわけです。とにかく、何かあるときは出してくれました。お寺なんかも若いうちから若妻会などに行って勉強していました。三日ぐらいの研修にも泊まり込みで早いのかなあと思いつつながら。だから、主人も、義母も出ることは理解がありました。外に出るときは絶対子供は連れて出ると、義母から言われて、二人の子供を預かってくれました。だから子供を連れて外に出たことはありません。仕事を続けられたのは親のおかげ

ですね。姑さんの条件が恵まれていましたね。

ハッスルする親には子供もよくついていきますよ。本当に家庭の理解が必要ですよ。様々なところで波及効果が出てきます。

遠征から帰るときは、帰る時間を教えておくことですね。家族総出で迎えにくるんですよ。そのときがいちばん涙が出ますね。小さい子供さんはとびついてきて、だんなさんはやっぱり出してよかったと。物語になりそうない場面でした。人間関係ができてくるし、婦人会の役割が大きいですね。どんなにいい選手でも家庭に恵まれないと不幸ですね。

婦人ホッケーの鹿児島国体大会場でのデモンストレーションの様子は報告写真集の一ページを飾っている。

インタビューでは大会後の全国大会への出場を巡る情況に多くを割いているが、その契機となったのは国民体育大会の開催だったのである。よく、スポーツ行事、イベントの一過性が云々されるのであるが、これはイベントがその後の普及の契機となった事例である。

当時の婦人にとっては家を離れて旅行することそのことが、親戚との再会の楽しさを含めて、動機のひとつになっていた。しかし農家の中心的な働き手のひとりである婦人の不在・遠征には大変な困難がともなっていた。このような条件のなかでも今日まで継続されてきた要因として底を貫いているのは、ホッケーのスポーツの魅力、樋脇高校ホッケー部を介した経験者、理解者の存在であろう。

東野さんの言葉にもあるように、嫁の立場の改善を通じた「家族の近代化、オープン化」をホッケーへの取り組みが促してきた点は注目されてよい。

また、イニシエーターとしての役割を果たしたかにみえる東野さんの個人的特性、家庭的条件にも眼を向ける必要がある。高等女学校までのクラスの委員長経験、スポーツ能力における卓越ぶり、義母の配慮、婦人会での長年の役員経験等々、これらの要因・条件に恵まれてはじめてこのような役割遂行が可能となったのであろう。

V. 家庭婦人ホッケーの継続

これまで述べてきたような契機で始まった樋脇町における家庭婦人ホッケーであるが、それは今日まで引き継がれてきている。しかも、マイナーなスポーツ人口であるとはいえ、表-2に示すような成績を残している。

表－２ 樋協家庭婦人ホッケーの主要成績

年	家庭婦人ホッケー全国大会
1973	1位
1974	1位
1975	1位
1976	1位
1977	1位
1978	1位
1979	1位
1980	2位
1981	2位
1982	1位
1983	1位
1984	1位
1985	1位
1986	1位
1987	1位
1988	2位
1989	3位
1990	1位
1991	5位
1994	1位

毎年といえるほどの全国大会への出場ではあるが、それが一部の上層部の関わりだけに終わらせないために次のような手順を踏んでいる。

まず、5月から6月にかけて樋協町内の12地区ごとに、町教育委員会主催で地区婦人ホッケー教室が開かれる。1989年に「樋協町ホッケー祭り」に統合されるまでは独自に6月末の2日間に開催されていた「家庭婦人ホッケー大会」で、各地区12チームが練習の成果を競う。ここでの優勝チームのメンバーを中心に、「全国家庭婦人ホッケー大会」に出場するチームは編成される。

これらの活動に対して、「第2回スミセイ健康財団賞」「スポーツ振興文部大臣賞」「サンライフ運動10周年記念大会特別賞」「町制施行50周年記念式典功労賞」等が授与されている。

続稿で紹介するように、樋協町ではホッケー活動に対しては自治体から特別の財政的支援が講じられ、家庭婦人ホッケーが支えられていることも見逃すことはできない。

注

- 注1) 例えば、読売新聞1996年3月16日付け掲載の、同紙実施「好きなスポーツ・全国世論調査」によると、「見るのが好き」「やっている、やりたい」スポーツとして25種目ほどがリストアップされているが、ホッケーはそのなかに含まれていない。
- 注2) 1989年の「第1回樋脇町ホッケー祭り」での前園清一氏の講演。次に紹介するのは、樋脇町社会教育課に残されていた手書きの講演内容記録である。前園氏は既に物故されており、貴重な資料と推察されるので、できる限り忠実に記録を再録することにした。なお前園氏は明治43年4月13日生まれ、樋脇高校には1950年～1957年まで勤務された。
- 注3) 1995年3月19日に樋脇高校ホッケー場においてインタビュー。
- 注4) 1995年10月11日に、東野さんの自宅でインタビュー。

謝辞

本研究においては、大学院生の山田英基君にお手伝いいただいた。フィールドワークの手法で研究を進めている同君にとりなんらかの益するところがあったとすれば幸甚である。

また、インタビューにこころよく応じていただいた方々、貴重な資料を提供していただいた樋脇町の関係者の方々にも衷心より感謝を申し上げる。

Summary

The purpose of this study was to investigate through interviewing how a new sport become popular in a small town in Japan.

In Hiwaki, a town with a population of about 8,500 in Kagoshima Prefecture, field hockey was first played by a high-school team in 1951 and has been gaining popularity ever since.

Hockey has been a minor sport in Japan and so the teams in Hiwaki have been able to achieve good results at national competitions.

Why did a sport as rare in Japan as hockey become popular in a remote site such as Hiwaki? It was the late Mr. Maezono who introduced hockey into Hiwaki. Let him speak about the situation when hockey was brought into Hiwaki.

The school wanted students to have self-confidence so that they did not feel inferior to students of traditional schools. Although I had scarcely experienced hockey I included hockey alongside badminton in the PE curriculum. Things needed for play but which couldn't be purchased, were made by students themselves at the beginning. At athletic meetings in 1952 and 1953, hockey-game was played to get the understanding of the townspeople.

It was almost expected that students would get better than students of major sports such as soccer or basketball and that modern elements and the spirit of hockey would be internalized.

The hockey club was formally founded as a school sports club in 1952, and gained entry to the National Sports Festival in 1995. (at the first hockey festival of Hiwaki-town, September 3, 1989)

The Hiwaki high school hockey team participated in the National Sports Festival in 1955 for the first time. Since then the team has achieved outstanding results. Nowadays Hiwaki high school is known at the national level as a premier hockey school.

Let a players, who graduated from the senior high school in 1995, talk of their hockey career.

From elementary school to junior high school I had played soccer. In my 3rd year of junior high we won the pre-

fectural championship, and participated in the Kyusyu competition.

Classmates and seniors invited me to play hockey at high school. At high school we had very hard practice, but I never thought of giving up. My parents have sports careers (father : relay road race, mother: basketball). They often came to cheer me on. My younger brother followed me into the hockey team.

I have been promised a position in a certain company. The company is big, and its hockey team is preparing for the National Sports Festival to be held in 6 years. After that I hope to be transferred to another branch factory near my birthplace. The supervisor of the school team recommended me to the company, and I know almost nothing about the company or the hockey team yet.

Sport is good to get a position. (1995 graduate, March 19, 1995 interview)

The women's hockey team was born in 1972 when the National Sports Festival was held in Kagoshima. Hiwaki town was designated the place for the hockey matches at the Festival because hockey was exceptionally popular there. The town's women learned how to play hockey, and offered hospitality toward players, officials and observers.

After the Festival, women continued playing hockey. Since the following year, 1973, they have participated in the women's national hockey meet, and have achieved good results.

Nowadays women's hockey classes are held at twelve places in Hiwaki from May to June (1,221 participants in 1993). At the end of July, the teams representing each village take part in the Women's Hockey Meet of the town. Some five hundred townspeople participate every year. The meet has become one of the greatest events of the town.

The town team trains hard for the national meet held in August. Town teams have won good results.